

全員参加の手作り安全活動

古川営林署 ○基幹作業職員 蘇 武 要 悦
 総務係長 奈良 一 志

1. はじめに

栗駒森林事務所は宮城県北西部に位置し、国有林管理面積は約 6,000 Ha でその殆どが栗駒国立公園に指定されており栗駒山・栃ヶ森山周辺森林生態系保護地域を管理するなど森林の公益的機能の高度発揮の充実が求められている。また、周辺には観光名所が存在しており、平成9年の観光入り込み者数は約580,000人で昭和58年の360,000人と比較すると15年間で160%の増加率となっていることなど緑資源を背景に地域と密接な関係を持った森林事務所である。

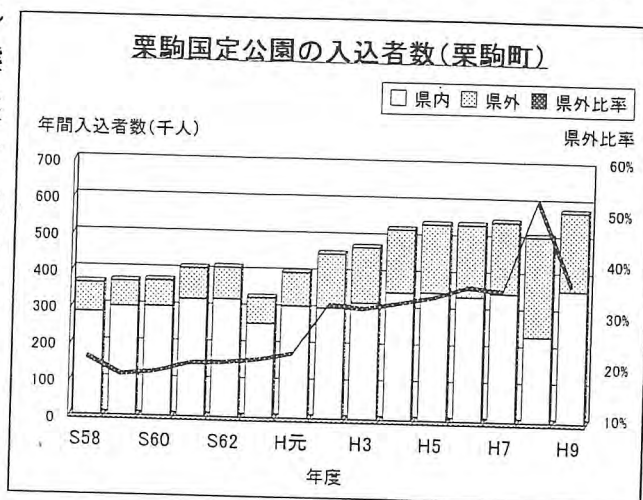


図-1 栗駒国立公園の入込者数

我が栗駒造林班には、基幹作業職員4名、定期作業員3名が在籍していますが、平均年齢は56.2歳で、古川営林署管内の作業員平均年齢53.4歳と比較しても高齢であることから、女性作業員が3名在籍することも含めて、これから紹介する安全活動や常日頃からの安全作業に対する取り組みは欠かさず行ってきた。

特に、我が班では13年前におきた災害を契機として、安全に対する意識も以前とは比べものにならないほど高まった。その災害は、作業現場へ向かう歩行中につまずいて転倒し、膝を石に当て受災するという災害であったが、入院加療を3週間要することになり、女性定期作業員ということで被災者の家族も大変苦勞されたことを当時同じ地区の者として、その状況を目の当たりにしてきた。

ちょっとした不注意により自分にとっても家族や周囲にとっても、こんなに辛い思いをさせなければならないことを痛感した私達は、これを機にそれまでの受け身になりがちだった安全に対する取り組みを強化させることとした。我が班ではその後、熊に襲われる災害が1件発生したが、現在無災害10年(約3,400日)で継続中である。

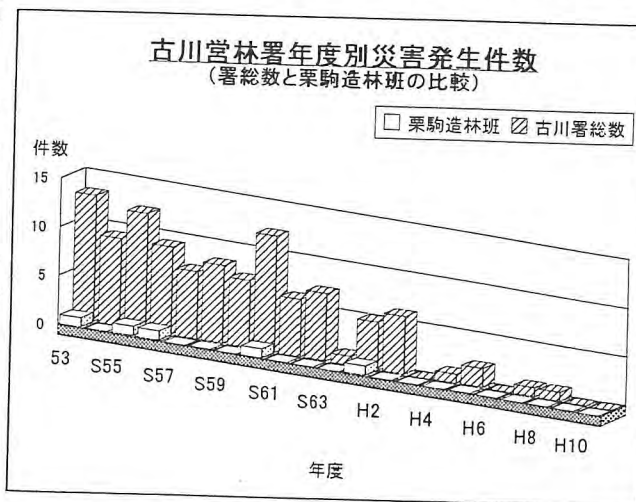


図-2 古川営林署年度別災害発生件数

私は今日まで10年間班長として勤めてきたが、それまでの安全活動を維持するとともに、皆のやる気にも後押しされ、連続無災害の更新、班の団結力の向上、そして災害防止の一番の課題と考える安全意識の高揚と持続、その動機づけを図る上で「見て、聞いて、話して、必要なら作る」の安全活動を実践してきた。

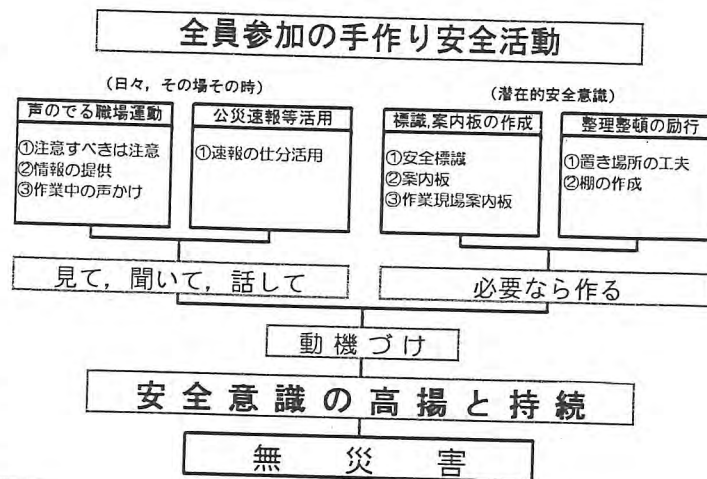


図-3 全員参加の手作り安全活動

2. 「見て、聞いて、話す」安全活動

(1) 先ず「見て、聞いて、話す」安全活動の一つ目として「声の出る職場運動」を実施している。栗駒班は以前からよく声の出る活気のある現場であったが、安全への職場運動として取り組めば、益々活気のある現場となり、安全意識の高揚が図られると皆で意見を出し合って次の3つに取り組むことにした。

1つは、注意すべきは注意せよ。

これは仲間に対して遠慮することなく悪い点は注意するということ。

2つは、情報は知らせよ。

これはプライベートにおいて人からの情報また、テレビ・本などによる安全や健康管理に役立つ情報は知らせよということ。

3つは、作業中は意識して声をかけよ。

これは声をかけることによってかけた人もかけられた人も安全意識への動機づけが図られるということ。以上の3項目を皆で取り組み当初はお互い気恥ずかしいこともあってなかなか定着に至らなかったが、一つの形式とし安全懇談会等で必然的に言い合うようにした現在では、誰からともなく積極的に話が出るようになり、安全意識への良い動機づけとして皆の中で定着することができた。

私達の班は女性作業員の在籍する現場であり、お互いに作業の気配りや安全衛生の配慮など気を使いながら、常に声を出しあってこれからも「活気のある職場」「災害のない明るい職場」づくりを通じ仲間との信頼感を保っていきたいと考えている。

(2) 「見て、聞いて、話す」安全活動の二つ目として公務災害速報を活用している。災害速報を活用するのは当たり前のことであるが、我が班では「公務災害速報綴り」を作成し活用するようになった。

【声の出る職場運動】

① 注意すべきは注意せよ！
安全上の問題点を放置せず、その場で注意

② 情報は知らせよ！
情報の出所に関わらず、
安全衛生関係の情報は積極的に提供

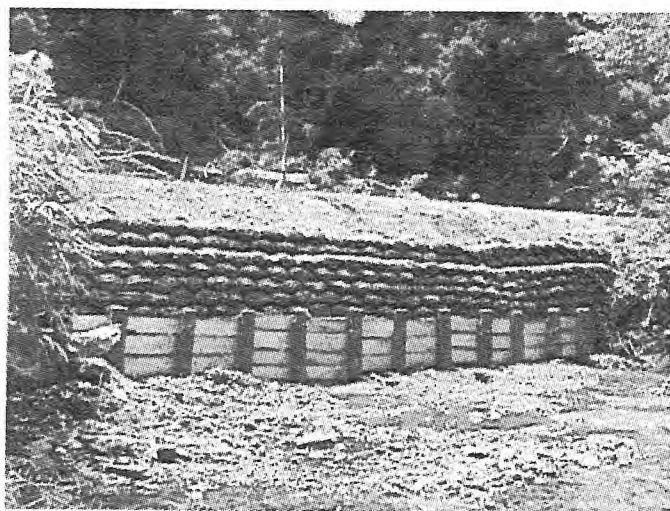
③ 作業中は意識して声をかけよ！
作業中の安全意識高揚のための声かけ

図-4 「声の出る職場運動」

写-7
上のう積の状況



写-8
災害復旧工事
完成の状況



写-9 復旧工事完成（2ヶ月後）の状況

以前、現場においてヒヤリ・ハットを起こすごとに災害速報の話題になり、その災害の原因や対策を思い出さないうまま次の作業に入ることもあったことに対し、皆の問題点是正の声もあったことがきっかけで、意見集約した結果「公務災害速報綴り」を作成するに至った。

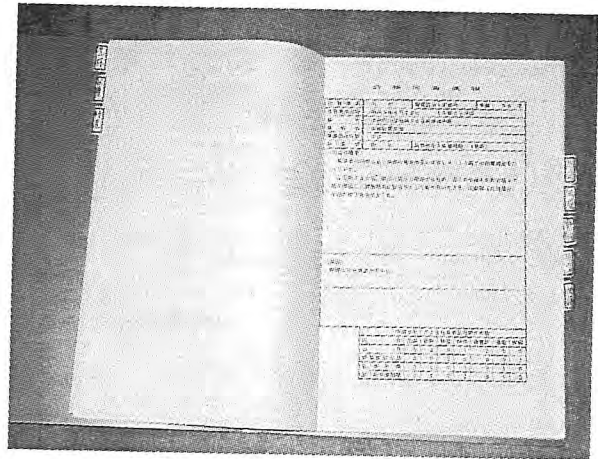
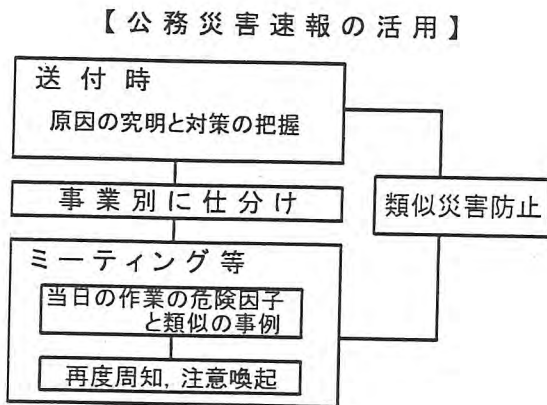


図-5 「公務災害速報の活用」

写-1 公務災害速報綴り

現在でも送付された速報はその場で班において原因の究明、対策を把握し類似災害防止に努めているが、その場限りということではなく、その速報は各事業別に仕分けし綴っておき、例えば当日除伐作業をする場合には朝のミーティングで過去に起きた除伐作業での災害速報の中から当日の作業で考えられる危険因子と類似する災害事例を再度周知し注意喚起することとしている。また、署の安全衛生だよりも動機づけの一つとして活用してきた。

このことを毎日続けてきた結果、安全意識の高揚を図れたことは当然のこと、班員の安全に対する積極的な姿勢が見られ「活気のある現場」になることができた。

これまで 安全意識を持続させることは簡単なことではないと考えてきた。しかし動機づけとしてやれることはあり、それが安全に少しでも結びつくことを我が班は知った。「見て、聞いて、話す」そんな本来あるべき職場の姿を、あって当たり前と思わず今後も全員参加で知恵や意見を出し合い安全活動に取り入れていく考えである。



写-2 安全懇談会



写-3 始業時のミーティング

3. 「必要なら作る」安全活動

(1) 栗駒班では間伐材を利用した手作りの標識・案内板の設置による安全活動も行っている。全員参加で何か手作りの安全活動ができないかと考えたのがきっかけであるが、作成に当たっては、先ず、どこへどのような種類の標識を設置するか、どのような標語にするか、また看板にするか、標柱にするか、どの程度の大きさか、そんな意見を出し合い、10数年前から設置し始めた標識・案内板は現在30ヵ所で作成した数は約50枚になる。材料は常に保管してあり、悪天候時の環境整備を利用し作成してきた。大量に作ることはできないが、1枚1枚に全員の安全に対する願いを込め、骨組みを作る人、看板を削って仕上げる人、ペンキを塗る人等必ず皆が手を加えることとしている。

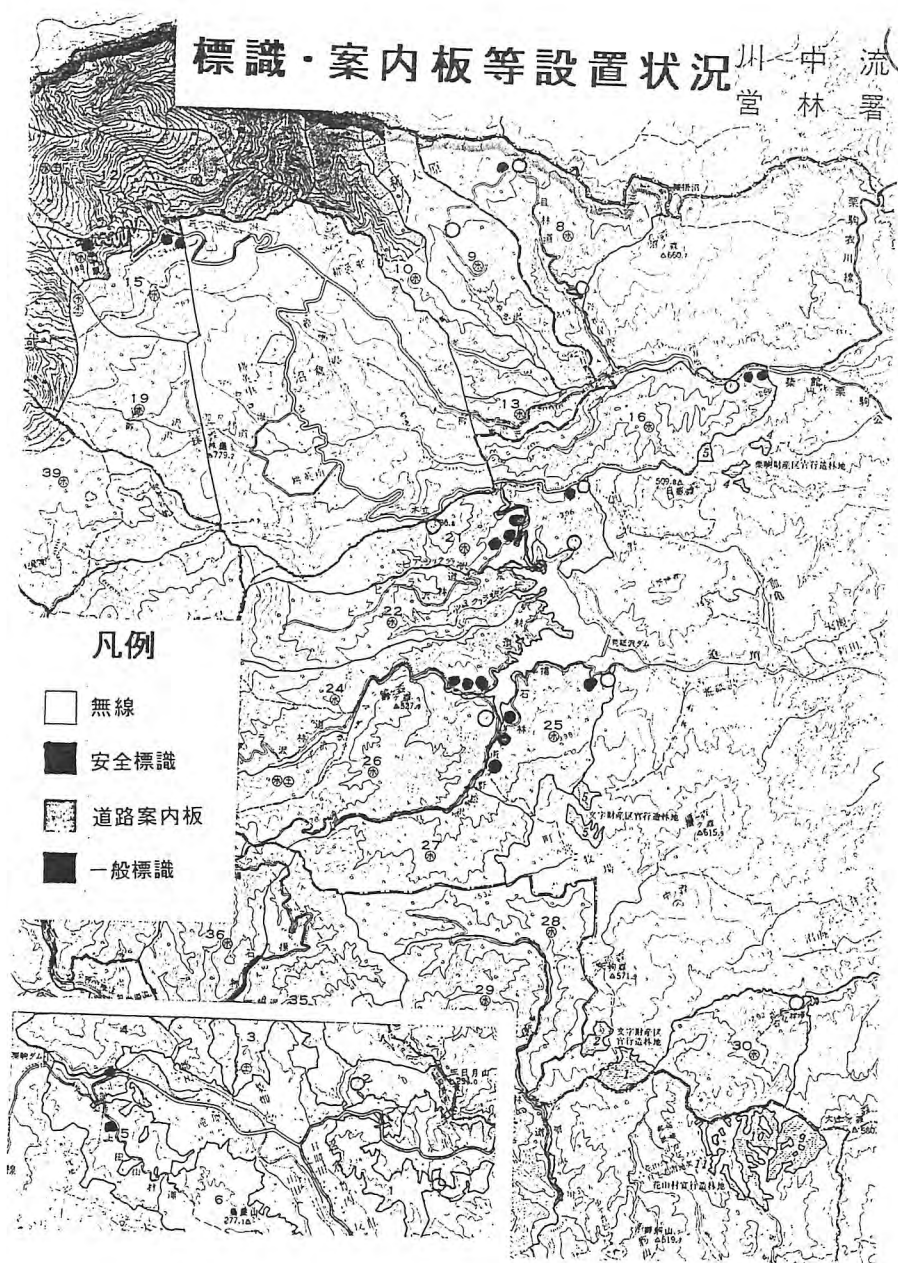


図-6 標識・案内板等設置状況

安全標識は毎日どこかで目にするものであり、班にとって、また、古川営林署職員にとっても確実に安全意識への動機づけが図られることになっている。

また、この安全標識は、古川営林署のみならず一般入林者にも配慮している。近年、自然との触れ合いを求める多数の一般の人達が山や川へ訪れるようになったが当然、観光名所の多い栗駒管内にも入山者は多く、一般車両通行禁止の標識は設置しているものの、多数の人が入山しているのが現実である。

その場で会った時は当然声をかけ注意喚起しているが、この広い国有林であり、標識によって安全を促すことが何より効果的と考える。



写-4 安全標識



写-5 安全標識



写-6 安全標柱



写-7 安全標識

案内板について、作業現場案内板は持ち運びができる簡易なものとなっており、署内職員にとっては、毎朝行われる無線による作業箇所報告とは別に、詳細な箇所の把握ができるとのことであり、緊急の連絡時、救急連絡時において効果があるものと考えている。



写-8 作業現場案内板



写-9 作業現場案内板

また、道路案内板は、先程も述べたように、国有林の殆どが観光ルートに所在していることから、国有林へ入る一般の人達への道案内として設置することになったが、以前、帰り道を聞かれたり、現在の居場所を訪ねられたりすることが何度もあり、一般の人達が山に入った時帰り道に迷い違う支線へ入りそれが災害につながる場合も考えられると判断し作成するに至ったが、何々方面と大きい市町村名だけ掲示するだけで何らかの形でいろんな人達の安全に役立っていると考えている。



写-10 案内板



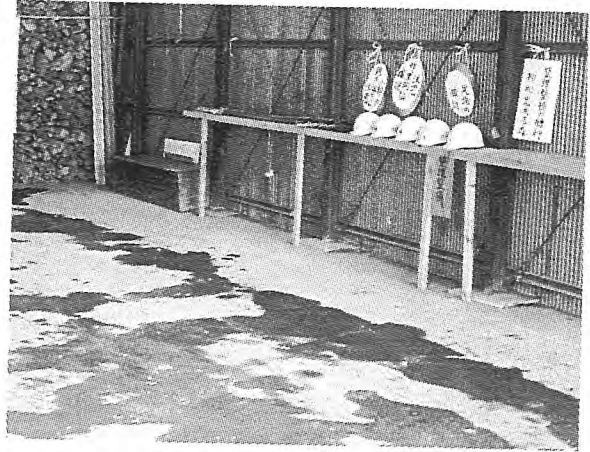
写-11 案内板



写-12 案内板

(2) 整理整頓の励行

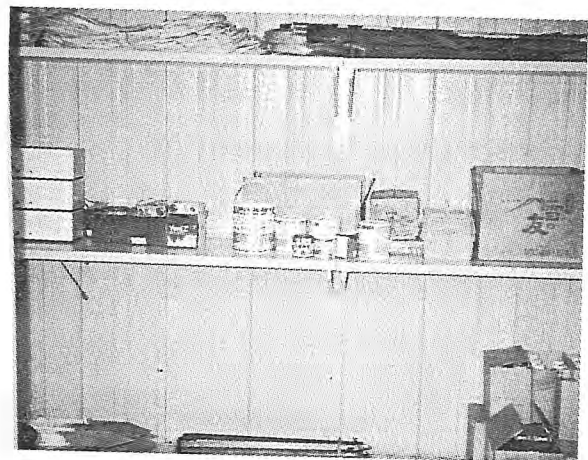
安全は作業現場だけに配慮するものではないと皆の安全意識が高まるにつれ、車庫内や道具倉庫の整理整頓について、知恵を出し合って置き場所の工夫や棚の作成による整備をしてきた。取り出しやすさ、使いやすさ、見た目の気分の良さ、これらに重点をおき心身ともに安全作業に配慮することで、良い環境作りに取り組むことができた。



写-13 車庫内の状況



写-14 道具倉庫の状況



写-15 道具倉庫の状況

4. むすび

何事も持続するというのは容易なことではなく、安全意識の高揚と持続させることは簡単なことではないとこれまでの経験で感じている。同時に、それは行動を起こさない限り何も解決することはできないとも感じている。

我が班では、潜在的な安全意識に対する動機づけを行うために標識、案内板を作成設置するという「必要なら作る」ことを実践し、また、日々、その場その時の安全意識に対する動機づけのために行う公務災害速報の活用や、声の出る職場運動を通じて「見て、聞いて、話す」ことを実践してきた。

このような取り組みを行ってきた中で、ほんのわずかなことでもそれを促すことができるということが分かり、全員参加の手作り安全活動の成果と感じている。

最後に、やはり働く者にとって「安全」そして「無災害」というのは永遠のテーマであり、常についてまわる言葉である。なおさら私達の職場は安全作業を行ううえで条件の悪い職場である。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という言葉があるが、改めてその気持ちを大切にしていき、そんな中で同僚達との和を保ちながらその日の作業が無事終了したならば、これほど素晴らしいことはないと思っている。どこの班も同様と思うが、我が栗駒班も日々そのことだけを願い今後も全員参加の安全活動を推進し無災害の継続に努めて参りたい。